

『陶淵明考』(其五)「寂蓼」東と西:漢詩の英訳(7)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 信夫, 大木, 俊夫, Kelley, David B. メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/216

『陶淵明考』(其五)「寂寥」東と西：漢詩の英訳 (7)

櫻井信夫*・大木俊夫**・David B. Kelley**

(名誉教授*・英語**)

Contemplation on Tao Yuan-ming (Part five): Desolateness East and West: An Experiment in Poetic Translation (7)

Nobuo SAKURAI*・Toshio OHKI**・David B. KELLY**

Professor emeritus ; English***

Abstract: Tao Yuan-ming, who was favored by the governor of the Province where he lived his official life, was invited to a farewell party given in honor of one of the governor's friends. Tao made a poem for the occasion (Farewell on an Autumn Evening). The farewell poem made by a lonely, old poet who had lost his wife, deeply moved those present at the party. The happy occasions which he had shared with his wife remained in his retrospective poem (Spring Longings). It seemed that he enjoyed the freedom of his hermit-like life, released from all the restrictions that his official life had imposed upon him. In fact, he basically lived a rather nihilistic existence, feeling that 'Human life is but an illusion, /It all ends in nothingness' (Back to the Rural Life, No.4).

We have consistently viewed the poet's life as one in which he was treated as an outcast and, in his attempt to struggle against the oppression alone, was exhausted and retired to his solitude. Arrogance, condescension, and deception are all aspects of human nature which have existed throughout history. Therefore, we compare his situation with modern social situations in an attempt to translate his poems into English. We believe that his poems mirror some of the struggles which people are experiencing in modern societies.

Sakurai expresses his personal views on social discrimination in the 4th chapter of the present paper.

はじめに

本考の始めに触れたが、旧制中学、高等女学校で漢文を学んだ人々は陶淵明と聞けば、隠遁の田園詩人と謂われた彼の詩句の二つ三つを暗誦できる。少年少女達は、「菊を採る東籬の下 悠然として南山を見る」、「盛年 重ねて来らず 一日 再び晨(あした)なり難し 時に及んで当(まさ)に勉励すべし 歳月は人を待たず」、「帰りなんいざ 田園まさに蕪(あ)れんとす なんぞ帰らざる」等々を愛誦した。此等の日本語読み漢文は日本語の基礎教養として行なわれ、日本語の語彙を豊かにした。本論は、其の陶淵明が少数民族溪族に属し華人(漢族)から夷民族と蔑まれ¹⁾、隠遁せざるを得なかったと謂う視点に立つ²⁾。

第一章 陶淵明の詩史の現代的意義

敗戦後、占領軍は教育制度変更を押付け、ドイツは自らの文化を誇って拒否し、日本は内閣・官僚の弱腰から屈従した。日本改造の使命感に燃えた人々が占領と共にどっと乗り込んで来た。彼等は任務の基本戦略が日本占領の仕上げとしての伝統・思想・文化の殲滅であることを殆ど知らず(1950年朝鮮戦争勃発後、アメリカは基本戦略を若干変更した)、其の多くは善意に溢れ敗戦国日本にとって幸いであった。同時に、日本人の中に米本国の日系市民が出自が日本人であるという人種的理由で市民的権利と自由とを蹂躪・強制収容され、他方ドイツ・イタリー系市民は自由であったのを知る人々も少なくなく、日系とドイツ系市民に対する基本思想に決定的差異が存在した。米本国での日系市民に対する人種差別と、占領下での「日本語を話せない大男」に由る強盗、強姦の多発とは³⁾、彼等の優越感と冷酷さを顕(あら)わにし、WASP(White, Anglo-Saxon, Protestant)男性の価値観が決定する米国社会の人種差別を嫌応無く実感させた。“Gone with the Wind (M. Mitchell)”の「Atlanta 陥落」を思い浮べた。「日本語を話せない大男」とは、苛酷な言論統制⁴⁾でアメリカ兵と書けない日本の新聞記者の苦心の表現で、占領中の傑作用語である。米軍は日本婦人を集めさせクラブや慰安所という淫売施設を全国の米軍基地の街に開設させた。当時鉄道の切符の入手は困難で、切符を入手できず駅をウロウロしていた娘達がダンサーと騙されクラブに送られたと謂う。筆者の一人櫻井の無給インターン時、社会医学のクラブ検診実習で出会った故郷には帰れないと涙した慰安婦は、それぞれ事情はあったに違いない市中のパンパンと呼ばれた女達や遊びの為に安易に体を提供する女達とも若干違う集団で、検診後普通の娘さんとして話を聞いていた際、突然涙した。1993年、NHKTVが放映した「48年目の戦争花嫁」というドキュメントで、黒人兵と結婚したクラブ出身女性は“当時、是れ以外の選択は無かった”と告白した。朝鮮人元慰安婦問題を言い立てる人々は、日本婦人の米軍慰安婦問題に知らぬ振りや自国の悪口を言い、米国には全く文句を言わない。日本人慰安婦の一部は、「忍甲一：米兵専用慰安所細見」³⁾等に明かである。

また、日系兵士がアメリカ市民としての忠誠を証明する為に強制収容所より志願従軍したことを知り、当時彼等の中に「日本がアメリカに戦争を仕掛けたから、自分達の一生が減茶減茶にされた」と、日本への深い恨みを持つ人々がいても、反論はしなかった。

日本人の公職追放・就職制限の指令は、解釈次第で誰をも追放できる前近代的脅迫であった。⁴⁾ 教育制度等の根本的変革、歴史教育の否定等は基本戦略であったが、実験的实施は一部司政官のお遊びで、日本は自信無き実験の試行錯誤の中で現在の教育体系を見出した。米本国での主として私学依存の教育体系に此等の実験結果は全く影響しない。東洋古典についての素人が中国・東洋文化の学習は無用と、青少年の日本語教育における基礎教養としての日本語読み漢文体系を破壊した。当時、吉田茂首相等一部を除き、官僚の大半は占領軍の脅迫に屈し当面の問題解決の回避を事とした。毅然として占領軍官に対応する心構えを欠いた日本の官僚・政治家は脅かせば言いなりになるとの軽侮を残した。現在、日米交渉で米国は期限を切った制裁措置で脅迫し受諾を迫るのを常套手段としている。他方、日本の自動車製造技術を盗めと、ロボット・ライン、金型を入手し、作業員の訓練までして貰う「フル・ターンキー」で生産設備を導入、その上、厚かましくも其の自動車を日本に買えと言う(唐津一: Voice, 1月号, 1994)。諺に謂う、恩を仇で返す恥知らずと。同教授は、モノづくりには現場だけから生れる技術の中核があり紙には書き切れない。其等を磨き上げるのが決め手である、と言う。今、日本車には新型の希薄燃焼エンジンが搭載されるようになった。クリントン政権は、為替操作で円高誘導をする保護主義に固執して倫理感が薄れた。米国は一時的な衰微を示しているかも知れない。諺は古川に水絶えずと謂う。彼の国は大国の矜持・人間平等の建国精神を忘れたのであろうか。James Fallows氏は'86年春、広島原爆資料館を訪問し衝撃を受けた。其の彼が'89年偏見と悪意で事実を歪め「日本異質論」の論客となったのは、広島の後も不要のプルトニウム爆弾を長崎に投下し人体実験を追加した自国のholocaust行為を自覚した誤魔化しであろう。東京大空襲・沖縄戦の一般住民避難壕への火炎放射・ガス弾投入も、holocaustの実行である。野党時代の社会党が国の戦争責任による国家補償として被爆者援護法制定を選挙公約した。日本自体の責任による個人補償とは、福田元首相の原爆正当論支持と同じく米国の原爆投下を正当化する。holocaust実行者に補償を要求すべきである。社会党や社会党化した自民党の日本断罪史観は自ずと原爆正当論の立場を誘導し、米国に免罪符を与えた。東アジア諸国は此の政権維持の為に日本の名誉を捨てた政策に失望と軽侮とを抱いた。

日本人は初めての敗戦と成り上がり司政官の脅迫に戸惑い、多くの人々が志と民族の目標を見失なった。優雅で堂々とした優れた民族(Townsend Harris, 1804-78)と讃えられた上品な振舞い・微笑みを忘れ、現在作り笑いをJapanese Smileと呼ばれるようになってしまった。戦後も遥か1993年、外交理念も実績もなく同盟国無視の単独行動でロシア支援に失敗した米大統領は、経済的後始末を勝手に日本に押し付け内政に後退した。血迷ったロシアは援助して貰う立場を忘れ、大威張りで日本たかりに出て来た。事実無根の教科書批判が産経新聞の訂正で解

決した後、国際的孤立や批判を恐れるだけの宮沢官房長官は中国に無用の謝罪をし、以後彼等が日本に対し理不尽な高圧的態度を取る端緒を作った。此のような人物を弄臣(屈從的道化幫間)と謂う。そして、首相になった奇妙な作り笑いの人物はまたも佞人(ごますり)根性で、米大統領と自国語でなく異質の受験英語で会談した。公式会談で他国語を喋る不見識は軽侮を招き、クリントン氏は記者会見で討議もしない事項を発表し、優越感と傲慢とで日本の首相を侮辱し国内向けのポイントを稼いだ(H.キッシンジャー元国務長官、於L.A., '93-4-20)。日本人は自国首相の幫間振りを恥じたが、同時に、元長官の言う失礼な態度はビデオ・テープに残り、ニヤニヤするArkie Smileの中に日本叩きで人気取りを図る大統領の焦りを見抜いた。東アジア諸国は、米国の国是の善意と影響力とを信じている。しかし、先輩カーター氏と同じく哲学無き言葉遊び・気まぐれを繰り返すベトナム戦争徴兵忌避のクリントン氏の人格と脈絡無き外交を信頼出来ないでいる、と謂う。スラブ族や漢族もクリントン・米國を軽んずる。東アジア人は中ソの核ミサイルでの脅迫への抑止力をクリントン・米國に期待出来なくなったと謂う。

残念ながら日本も、政権を失い再び権力を望んで無節操に敵対党社会党に屈従し、社会党化した自民党が日本に恥を齎らす。'94-7-24、韓国よりバンコクに向かった河野洋平外相は台風の影響で搭乗機が台湾に緊急着陸した。翌日中国外相と会った際「(中国を唯一の政府として認めるとの)日中共同声明の精神をもっていたので、飛行機の中で給油だけするのを待っていた」と話し、中国側は大笑いするばかりだった('94-7-26 産経)。東アジア諸国は、中国の優越感と嘲笑とを見て、自ら隷属的態度を示す河野氏ら弄臣佞人への中国の軽侮と指図は尾を引くと見た。湾岸戦争当時 PKO協力法へ牛歩戦術での妨害を指令した社会党左派の国対委員長村山氏を記憶する諸国は、援助は歓迎しても其れを信頼と混同する河野・武村・村山氏らを評価しない、と謂う。リーダーの信念と哲学とを失った弄臣らの社会党史観での謝罪偽善を嫌悪するアジアの鋭い日本観察に留意すべきである。

情緒的に米帝国主義打倒を叫んでいた社会党左派は米國の意志を見誤って居るようだ。政権党になってからの彼等のさもしさは、自衛隊派遣の為の連立与党「ルワンダ実情調査団—社会党岩垂寿喜夫団長」が活動拠点ザイール・ゴマの視察は一日だけで、ロンドン観光やケニアのサファリ観光を楽しんだとの報道('94-9-9, 産経)が自民党がコケにした為としても⁹⁾、目に余る。1980年外交感覚ゼロの鈴木善幸氏が偶然首相になり、宮沢官房長官は「参勤交代じゃあるまいし、直ぐ訪米する必要は無い」と放言、一年後の訪米で鈴木氏は鈴木・レーガン共同声明を「同意していない」と否定して侮蔑された。クリントン氏の言動は其の遠吠え・嘘つきを教えられ、お返ししたのであろう。米國國務省・議会には誠実な、姿を見せない鋭い調査担当者がある。同国は'94-9-7、対台湾関係を格上げし、台湾の代表部に台北の名称を入れ、政府高官の交流は活発化し、総統・首相の通過滞在を認めるが、「一つの中国」政策には変更は無いと滑らかに言明した。中国は翌8日、10月のアジア大会にOCA会長から招待された台湾の総統の訪日は「一つの中国」承認に反し、断固反対しボイコットすると恫喝した。東アジア諸国は

米国が日本を援護したと見ていた。

弄臣佞人は名誉を棄てて中国の指図に屈し、李総統の来日拒否を策した。何たる非礼であろうか。核実験を繰返し、軍拡に精を出す中国は、'94年10月、日本は最早軍事的脅威でないと公言した。日本へのミサイル照準を完了したと言うのであろう。村山・河野氏等は其の十月下旬、来日中の大陸中国の榮毅仁副主席に唯一の被爆国として最大の懸念である中国の度重なる核実験に何の抗議も行わず、約六千億円の円借款を与えようとする。世界の日本に対する侮蔑・不信は消しようもない。米国がこのような日本を無視するのを覚悟しなければならない。東アジアは、軍事大国中国の支配的中華思想を排除して東アジア人共通の意識と連帯を望み、日本の協力を必要としたが、中国の核実験にすら抗議をしようとしぬい佞人への不信は強く、日本は東アジアの連帯から疎外されようとしている。

'93年5月、'94年5月・8月と中国共産党中央と国務院は党・政府機関に公務での現金の授受を厳禁した(天安門事件('89)後は特に酷くなった。矢吹晋：産経、'94-6-1)。魯褒の錢神論と同じである。人民は貪欲な党官僚に不満だが、賄賂は儀礼と謂う慣習は止まない。昔、貧乏に苦しむ淵明の為に財産を作るには縣令になるのが一番手取り早いと親戚・友人の努力で、彼は役得賄賂で財を成す縣令になった。しかし、実行を躊躇い、80余日で辞任してしまった。日本でも国会議員と謂う職業者には徒手で財を成す者が少なくなかった。自民党の老ボスが逮捕されて政権党時代の七十億円以上の不正蓄財が明らかにされた。国民は他議員らの逮捕も期待したが、元建設相N一人に止まった。錢神論を読む思いがする。陶淵明の詩史は常に現代に辿り着き、人類の経験の蓄積を示すのである。

第二章 失意の人

古来、中国では「隠者」「隠士」「逸民」等々、隠遁者を高尚な人々として異常な迄に称赞した。陶淵明は生きていた間から隠遁者として其の名を知られ、後世「古今隠逸詩人の宗(そう)」と絶賛された。しかし、彼が本当に隠遁を望んでいた訳ではない。陶淵明は自分の方から友を求めることはなく、「独りぼっち」は、結局彼自身の性格によるものであった。彼は後述の詠貧士七首其一で、自らの非協調的な性格を詠んでいる。

別れの詩(うた)：王撫軍の座に客を送る

東晋王朝第一の門閥貴族王弘(40歳)は江州刺司として着任して間もなく(418A.D.)、淵明(54歳)を訪ねた。彼は病気を理由に面会を拒絶した。妻の死によって「薨」状態にあったのであろう。折角来訪した地方長官を拒絶した彼の非礼を世間は非難し、彼も本当に病気であったと弁解しなければならなかった。王弘はなおも淵明に会いたいと望んだ。淵明が他出の際、共通の知人龐通之は王弘の意を受け酒肴を用意して待ち受け、彼を野亭での酒宴に誘った。遅れて王弘は自然に其の席に加わり、その後の交際の緒を開いた。

王弘の終始変わらなかった淵明への好意が何に由来するかは大きな謎であるが、淵明にとっては幸せな出逢いであった。初見の際、淵明が裸足であることに気付いた王弘は、部下に履物を新調させた。次の詩は撫軍將軍王弘が友人の送別の宴に淵明も招き、彼は禮を守って詩を贈った。隱士は公門をくぐらない慣習であったが、淵明は以前の非礼を詫び、素直に王弘に感謝しつつ交際していたのであろう。此のような晴れがましい席に列する際の前官礼遇の官服を淵明が持っていたとは考え難い。以前の履物の例と同様、王弘が官服を調べて彼に与えたと考えられよう。此の頃、淵明は「著作郎に徴され」辞退したが「徴士」の敬称を得て、社会的地位が高められた。王弘が推薦したものと考えられている。其の為にも、前もって官服を調える心遣いを払って呉れたものであろう。

華やかな筵席も終わり、遠ざかる旅人の舟を見送れば孤独な歳老いた隱士の虚しさが湧き起る。此の詩は送別の寂寥感に満ちて至情に溢れる。本詩の解釈に定説は無い。

於王撫軍座送客^{6,7)}

秋日淒且厲 百卉具已腓 爰以履霜節 登高餞將歸
寒氣冒山澤 游雲倏無依 洲渚四緬邈 風水互乖違
瞻夕欣良讌 離言聿云悲 晨鳥暮來還 懸車斂餘暉
逝止判殊路 旋駕悵遲遲 目送回舟遠 情隨萬化遺

(Chinese Pronunciation)

yú Wáng Fǔjūn zuò sòngkè

qiū rì qī qiè lì bǎi huì jù yī féi yuán yǐ lǚ shuāng jié dēng gāo jiàn jiāng guī
hán qì mào shān zé yóu yún shū wú yī zhōu zhǔ sì miǎn miǎo fēng shuǐ hù guāi wéi
zhān xī xīn liáng yàn lí yàn yù yún bēi chén niǎo mù lái huán xuán chē liǎn yú huī
shì zhǐ pàn shū lù xuán jià chāng chí chí mù sòng hū fēi zhōu yuǎn qíng suī wàn huà yí

Farewell on an Autumn Evening

On an autumn day it is bitterly chilly,
All the grass has yellowed and faded.
On the hill in this frosty season
We had a farewell party for departing friends.
A cold air veils the mountains and marches;
Floating clouds drift alone.
A sandbar stretches far down a river,
Sailing boats scatter in different directions.

A wonderful feast it was this evening
But a farewell dinner, so, I feel rather sad.

The birds taking wing in the morning return at dusk,
And the setting sun fades in an afterglow.
Those leaving and those saying farewell take off
in different directions,
In sorrow at parting, my carriage goes on slowly.
After seeing the traveler's boat off,
My soul remains in the changing twilight scenery.

秋の日はさむぎむとして厳しく	百の草はもう末枯 (すが) れて黄ばんだ
いま此の霜を踏む季節に	丘に登って 都に帰る人の送別の宴を持つ
寒い大気は山も沢をもつつみ	漂う雲は依るべもなく流れ行く
川の中洲は四方に朦(おぼろ)に隔たり	帆掛け舟はそれぞれの方向(むき)に遠ざかる
夕暮れの中の素晴らしい宴(うたげ)も	かくて別れの筵席とあって物悲しく
朝飛び立った鳥も夕べには帰り	沈み行く夕日の残照も消えた
行く人 送る人 其の道は分かれ	我が馬車は悲しみに 帰る歩みも遅い
遠ざかる旅人の舟を見送れば	我が思いは暮れ行き変わる景色の中に残る

平安の才女清少納言は此の淵明の寂寥を優雅に書き残している(枕草子, 245段)。

ただ過ぎに過ぐるもの 帆あげたる船。人のよはひ。春, 夏, 秋, 冬。

和郭主簿其二

此の詩は一見易しい叙景詩のように見えるが、終二句の解釈には種々異説がある。其の前の二句の解釈次第で、是ら終四句は古代の隠者への敬慕の詩になる。しかし、「和郭主簿其一」と併せ考えると、淵明らしい表現で遠慮勝ちに人を恋うる詩に託して、実際には久しぶりに手紙を受取って溢れる喜びの逆説的表現とも考えられよう。38歳頃の作か。

和郭主簿其二

A Reply to Guo Zhubu, No. 2

和澤周三春	Mild and moist are the three spring months;
清涼素秋節	A white autumn comes so cool and fresh,
露凝無游氛	The dew falls and no haze is in the still air:
天高肅景澈	The clear, blue sky and a quiet, limpid landscape.
陵岑聳逸峰	The lines of gentle hillocks and a towering peak,
遥瞻皆奇絶	Viewed from afar, all is a glorious scene.
芳菊開林耀	Fragrant chrysanthemums bloom in the glade;
青松冠巖列	The green pines in rows on the rocky heights.
懷此貞秀姿	Pondering these noble forms standing so firmly,

卓爲霜下傑 Their unbroken strength shows itself in the frost.
 銜觴念幽人 Cup in hand, I recall the ancient hermits.
 千載撫爾訣 They always cherished the distinctive shapes
 hidden in the frost.

檢素不獲展 Well, I've not heard for a long time from you,
 厭厭竟良月 And so I have spent this Tenth Month in sorrow.

穩やかで潤い多い春三月	そして 清々しい白い秋
露は下(お)り風は無い	天は高く 景色は澄みわたる
穏やかな丘の列なり 聳える峰	遙かに見渡せば すべて此れ壮麗
芳(かぐわ)しい菊は林間に耀(かがや)き	青松は岩山の高きにならぶ
いずれも気高く毅然とし	巖霜のもと すくくと立ち
古代の隠者を想い起させる	彼等こそ巖霜の下いつも風格を持ち続けた
ところで 長い間お便りがなく	私は鬱々と此の十月を過ごして何の良月かと

再び就職を希望する詩(うた)：和胡西曹示顧賊曹

終四句は解釈に異説が多く難しい。松枝・和田両氏は、かねて自己の志を実現したいと願っているのに、機会に恵まれない嘆きを暗喩したのか、と示唆された。

39歳、躬耕生活に入り心の平安を得た。家族に人並みの生活を与えたいと思っても、自らの心の平安を求める躬耕生活とは両立しない。加えて、収穫直前に蝗か何かの災害に襲われたのではないか。妻翟氏は彼の性格を思い遣り、農耕に従事して生活を支える。彼もなんとかせねばと焦ったのであろう。此の詩を友人達に示し、それとなく再び仕官したいと希望を伝え、幹旋を依頼したのであろうか、彼の焦りが伝わる。

和胡西曹示顧賊曹*

Purple Mallows

蕤賓五月中	It's midsummer, the fifth note on the musical scale,
清朝起南颺	On a clear morning, a south breeze is blowing gently.
不駛亦不遲	It rises neither swiftly nor slowly,
飄飄吹我衣	And my garment flutters lightly in the wind.
重雲蔽白日	Heaps and heaps of clouds veil the sun,
間雨紛微微	A gentle rain whirls drizzly,
流目視西園	I turn my eyes and look at the western garden
曄曄榮紫葵	Where brilliantly the purple mallows are in bloom;
於今甚可愛	How lovely they are, at their best, on this fleeting day,
奈何當復衰	But, there is no helping their fading away and dropping by and by.

感物願及時 Nature moves me to fear wasting such moment as these,
 每恨靡所揮 Very often I regret that I have very little wine.
 悠悠待秋稼 Gently, I wait for the autumn harvest,
 寥落將賒遲 But miserably disaster befalls me, maybe a short harvest.
 逸想不可淹 Such vulgar thoughts can not be suppressed,
 猖狂獨長悲 Distraught, the grief in my soul continues.

* : He handed this poem to his friend, wishing to find a job again.

時は夏の半ば 音律で謂う五番目の月 清らかな朝に南風がそよ吹き
 早からず 遅からず わが衣 ひらひらと舞う
 と、 重なる雲は日を隠し 霧雨は 静かに回り降りる
 西の園に眼を移し見れば 華やかに 紫の花あおい 咲く
 今こそ其の最も愛らしい時よ だが やがて萎れ衰えるを如何せん
 自然は時を失うのを恐れしめるが 此の時を楽しむべき酒の屢欠けるのを恨む
 穏やかに秋の獲り入れを待っている 何と 惨めにも災害が不意を打つ 不作か
 私の野暮な思いも 抑えられまいに 嘆きに気も狂わん許り 悲しみは長い

淵明の孤独・寂寥から逃れようと酒に頼る弱さが窺われ、妻翟氏の気苦労も偲ばれる。

独り長雨に飲む：連雨獨飲

淵明40歳（404）頃の作。連日しとしと降る雨に訪れる友もなく、独り酒を飲み詩を作る。「停雲」詩も、長雨に窓辺に立ち尽くし遙か遠い友を思い、独り濁酒を呷（あお）るが、其処では、杯を交わし語り合う友を恋うる至情に溢れる（前篇：追憶）。しかし、本詩には彼の負け惜しみの虚勢、依怙地さを感じず。其の依怙地さが次第に自らを隠遁に追い込み、更に、多くの友人が遠ざかる原因となっていた（擬古九首：其一、後述）。

連雨獨飲

Drinking Wine Alone on Rainy Days

運生會歸盡 Life moves to its inevitable conclusion:
 終古謂之然 Everybody has spoken this truth from of old.
 世間有松喬 There is common talk that hermits once lived here;
 於今定何間 But, who has heard of them recently?

 古老贈余酒 An old man comes with wine
 乃言飲得仙 And says, "this will bring you immortality."
 試酌百情遠 Drinking it once, my many worries recede;
 重觴忽忘天 Drinking again makes me oblivious of self-existence.

 天豈去此哉 Aha! The immortals' paradise may not be far from here;

任眞無所先 Better for me to give myself to naiveté,
雲鶴有奇翼 Like a crane in the clouds with their sacred wings
八表須臾還 Flying to the ends of heaven and returning in a moment.

自我抱茲獨 Since I have been nurturing my loneliness,
僂俛四十年 Forty years have passed in a moment.
形骸久已化 My body and form have been transformed;
心在復何言 From my untiring heart, there is nothing more to say.

独り長雨に飲む

生命の働きと謂うものはいずれは尽きる 昔から誰もが認めて来たことだ
世の中では昔仙人* が此の世に居たと言うが 今誰か其の消息を聞いた者がいるか

* 松喬：松は赤松子，喬は王子喬。ともに仙人の名。

村の古老が酒を呉れた 「此れを飲めば仙界に行けるだろう」と
一杯飲んで見ると憂き思いを忘れ 重ねて飲めば忘我の境地になる
何と！仙人の世界はそんなに遠くではない あるが儘の心に任せればそれで良い
神秘的な翼を持った雲間の鶴が 世界の果てまで行って忽ち帰って来るような心地だ
孤独をひとり育んで来たのも どうってこともない四十年であった*
体はもう既に衰えてしまったが 心はしっかりと変わりなく何も言うことはない

* 四十年：四十に特に意味は無く亡妻との生活の回想をさりげ無く詠んだのであろう。

淵明は多くの老後の詩に他人様にご迷惑を掛けないとの見栄・尊厳・自立を示す。

朝廷貴族が権力闘争に武士団を利用した保元の乱(1156)以後、番犬と思った武士が実力で浮上し、うとましい「武者の世」となった(慈円：愚管抄, 1221AD?)。新古今集(1205AD)は華麗さと哀調と時代の暗さに、朝廷歌人の心情を反映する。慈円僧上(1155-1225)の歌は諦め・寂しさに撒し彼等の共感をよんだ。慈円の心情は淵明のそれと似ているようだが、関白の子、天台座主と華麗な経歴の慈円と疎外貧苦の淵明との差は明かであろう。

昨日見し人はいかにと驚けどなほながき夜の夢にぞありける (新古今：833)

蓬生にいつか置くべき露の身は今日の夕暮明日のあけぼの (〃：834)

草の庵をいとひてもまたいかせん露の命のかかる限りは (〃：1659)

他方、足利時代末期の戦乱の中に生きる庶民はさらりと気張らず、深い諦観を歌う。

何(なに)ともやのう 何ともやのう 人生七十古来稀なり (閑吟集(1518)：小歌51)

世間(よのなか)はちろりに過ぐる ちろりちろり (小歌49)

おやまあほんに 私も何時の間にか七十歳 古来稀とやら どうってこともなく過ごして来ただけなのに ちろっと瞬(またた)く其の間の ちろちろっとのうき世であるよのう

古い詩の形を借りて：擬古九首，其一

本詩は古詩を真似て、友情の頼りなさを嘆く。劉裕が新王朝を開いた時、淵明の友人達は続々と首都健康に赴き新王朝に仕えた。劉裕を嫌う淵明は、彼等の出世欲を皮肉る痛烈な寓意詩を詠んだ。劉裕晩年の年譜を見れば、淵明に一理があるが、人にはそれぞれの生き方があり、淵明の依怙地さを嫌う友人達は離れた。本詩の解釈に定説は無い。

旅に出る人が「私」か「諸君」かで逆転し、「嘉友」が皮肉か真実かにもなる。「多謝諸少年」と謂う謎の一句の解釈にも天と地の差が齎らされる。こうした詩の英訳は、詩の背景を考え説明的になり勝ちになる。此の試みの当初より、professionalの訳がある時には非専門家の英訳は重複で無駄であろうとの意見もあるが、professionalと謂われる訳がどれだけ歴史的背景を踏まえているかを検討せずには、英訳の巧緻だけで引用するわけにはゆかない。但し、本小論の英訳がpoetic licence：詩的破格であることへの批判ならば、詩人の心情の理解とは別の問題になる。本小論では常に英訳を平易にと努めている。

劉裕年譜：義熙14年(418)劉裕(56歳)、晋安帝を扼殺、恭帝を立てる。永初1年(420)6月、劉裕(58歳)、恭帝に禅譲を迫り、帝位(宋武帝)に即く。晋恭帝を零陵王に遷す。永初2年(421)9月、劉裕(59歳)、零陵王(恭帝)を扼殺。永初3年(422)5月、劉裕(60歳)没す。少帝(劉義符)立つ。

擬古九首：其一

Nine Poems in the Old Style: No. 1

榮榮窗下蘭	My orchids are all aglory beneath the window;
密密堂前柳	Luxuriantly, the willows spread before my hall.
初與君別時	When I parted from you first,
不謂行當久	I did not think about how far your journey would be.
出門萬里客	After you left home to travel so very far away,
中道逢嘉友	On the way you met another excellent friend;
未言心先醉	Both your hearts were tipsy without even uttering a word,
不在接盃酒	Nor exchanging cups of wine with each other.
蘭枯柳亦衰	My orchids have faded and my willows have withered, too,
遂令此言負	You have broken your promise to me at our parting.
多謝諸少年	I have to say, what such slovenly young men!
相知不忠厚	We knew our promises could not be kept.
意氣傾人命	If we found a congenial spirit, even at the risk of our lives,
離隔復何有	It shouldn't worry us to live separated from each other.

窓下の蘭は咲き誇り

座敷の前の柳は生い茂る

あの日諸君と別れた時

こんなに諸君の旅が長くなろうとは思わなかった

門を出て長旅をする間に

諸君は素晴らしい友人に出遇った

口もきかぬ先に酔い心地に 何しろ酒杯のやりとりをしたわけでもないのに
 秋が来て蘭は枯れ柳も萎れた今 諸君は別れに際しての私との約束を反古にした
 私は言おう 若い出鱈目な男達よ あれは正直や寛大さではなくがらくただったね
 生命を懸けて意気投合したのなら 遠く離れて居ることなんか何ら気にもならぬ筈だ

歸鳥：淵明42歳(406)頃、帰郷後の作であろう。鳥に託して故郷に隠退する心を述べている。妻翟氏が「そんなに宮仕えが嫌なら、家にお帰りなさいな」と勧めたのではないかと思う。家庭との関連を考えることなしにこのような詩を解釈すると、彼の心境を見誤ろう。もう二度と故郷を離れないと謂う彼の思いが詩中に溢れ、晴れやかである。

歸鳥

A Bird Returning Home

1

翼翼歸鳥	Fluttering, fluttering are the returning birds.
晨去于林	In the morning they leave a grove;
遠之八表	Flying far even to the ends of the world,
近憩雲岑	While alighting on a neighboring, cloudy peak.
和風不洽	The wind does not always blow gently;
翻翻求心	They turn and recall their wish to return home,
顧儔相鳴	Looking at each other, warbling to one another,
景庇清陰	They shelter themselves in the cool shade.

2

翼翼歸鳥	Fluttering, fluttering are the returning birds,
載翔載飛	Soaring in glee and gliding in composure.
雖不懷遊	Though they are determined not to loiter on the way,
見林情依	Seeing an inviting grove, they feel excited,
遇雲頡頏	Encountering clouds, they test their heights, and
相鳴而歸	Warbling in company they settle down to roost.
退路誠悠	The end of their journey is yet far,
性愛無遺	But they never forget their longing for home.

3

翼翼歸鳥	Fluttering, fluttering are the returning birds,
馴林徘徊	Lingering here and there in the grove.
豈思天路	They do not think about the lofty road any more,
欣及舊棲	But it makes them happy to be back on their old turf;
雖無昔侶	Though they no longer find former friends,
衆聲每諧	Their chirping always makes sweet company.

日夕氣清 In the evening the air is refreshing
 悠然其懷 And they feel their hearts contented and quiet.

4

翼翼歸鳥 Fluttering, fluttering are the returning birds,
 戢羽寒條 Furling their wings to rest on withered wintry branches,
 遊不曠林 They do not wander beyond the wild forest,
 宿則森標 And roost on the top of thick-foliaged trees.
 晨風清興 When the morning breezes blow refreshingly,
 好音時交 They vie with one another in sweet chirping.
 繪繳* 奚施 There is no shooting here with a bow and silk-cord arrow,
 已卷安勞 They just fly and need not worry themselves over anything.

* A device for killing birds with an arrow attached to a silk cord.

古巢に戻り行く鳥

1. ひらひらと古巢に戻り行く鳥 朝林を立ち 地の果て迄も飛び 近くは雲懸かる峰にも休んだ 風は何時でも何処でも穏やかに吹くとは限らない そこで翼を返し古巢に帰りたい心に立ち返り 仲間を見やっては鳴き交わし また涼しい木陰に憩う
2. ひらひらと古巢に戻り行く鳥 空高く翔びまた穏やかに飛ぶ 道草はしないと決めても林を見れば心を惹かれ 雲に遇っては高さを競い合い 仲間と鳴き交わしてはねぐらに帰る 遙かな旅路は本当に遠いが 古巢を恋うる想いは忘れない
3. ひらひらと古巢に戻り来た鳥 林の上を歩きつ戻りつ飛ぶ もはや天空の路を思うこと無く 古い棲み家に戻った幸せを思う もう昔の友は見掛けないが 仲間は何時も楽しく鳴き合わせる 夕暮れの気は清々しく ゆったりと心寛 (くつろ) ぐ
4. ひらひらと古巢に戻り来た鳥 冬枯れの枝に羽を窄(すば)める 遊ぶのも果てしなく広い林を出ることもなく 宿るのは木深い森の梢 清々しい朝風は吹き起こり 鳴声を好ましげに鳴き交わす 紐矢 (射包 (ぐる)みの矢) を射掛ける者もおるまい* もう十分に飛んだ これ以上気にすることもあるまいに

* 官吏の柵 (しがらみ) からやっと離脱できた喜びを歌う寓意。

人を恋うる詩 (うた) : 雑詩十二首其九

雑詩は50歳前後の作と考えられている。本詩の解釈に定説はなく、英訳は試みの一つである。詩は行役の苦しみを詠み、彼の官吏嫌悪の情は強い。家族との夕食を思い浮かべ、職務を放棄し帰郷したいと願う。彼は実際行役時に此の詩を詠んだのか、または、後年の回想であるか。官吏の職務放棄は死を意味する。關梁 (the checkpoints, i.e., the customs barrier and bridge; a hub for land and water transportation) の通り抜けは職務放棄者には不可能で、出来ることなら破壊してでも帰郷したいと考えている。此の過激な表現は現職の官吏として不謹慎であ

り、強い思い出に基づいたものであろう。

Nostalgia

遥遥從羈役	Far away I go on a journey of duty,
一心處兩端	My heart is torn between here and there,
掩淚汎東逝	Holding back my tears I sail eastwards,
順流追時遷	Giving myself over to the flow of time.
日没星* 與昴	Alphard and the Pleiades appear,
勢# 翳西山巔	As the sun hides behind the western peak.
蕭條隔天涯	I am desolate, being so far from my family,
惆悵念常餐	How I long to sit for a meal with them.
慷慨思南歸	Back to the south, I am anxious to go,
路遐無由緣	The road is long but I have to go on,
關梁難虧替	Besides, I must pass through all the checkpoints;
絕音寄斯篇	And because of my long silence,

I have couched my letter in verse.

はるばると巖しいつとめの旅に出て	私の心は引き裂かれる
涙を抑えて東に向かう船の旅	時の移るのを追い 流れに任せて行く
ほとほり(熱り)星とすばるは瞬き始めた	太陽が西の山稜に隠れて消えたのだ
わびしくも家族と天の涯(はて)に隔てられ	残念にも私は彼等との夕食を偲ぶのみ
南の方(かた)に帰るのを燃える思いで望む	道は遙か でも何のたでも無い
其の上、関所も橋も壊すことも出来ぬ	便りも出さずにいて 代わりに此の詩を送る

*：星(せい)：海蛇座中央部の七星を指し、二十八宿の一、星宿を謂う。ほとほりは現在のほとほり(熱り、余熱)である。南天の海蛇座中央の α 星は2等星で赤く光る。 α 星：星座の中で最も明るい主星を指すが、近くに輝星が無い為に目立ち、和訳の熱りは灰の中の残り火、燠(おき)を意味する。固有名のAlphardはアラビア語のal Fard(孤独なもの)に基づく。春の日没後北西の空に低く輝くPleiades昴(すばる)の南約90°にTaurus(牡牛座)の熱り星(ほとほりほし)Alphardが輝く。しかし、此の位置関係から両星が同時刻に西の山に隠れることは有り得ない。

#：勢(せい)：松枝・和田両氏は星宿の運行を指し、一海氏もまた同様の見解を示す。しかし、上述の解説のように、星団の動きと見る訳にはゆかない。とすれば、実際に動きを示す天体は太陽と考えなければならない。和訳・英訳ともに其の見解をとった。(春の星座の運行をPlanetariumで確かめれば、淵明に強い印象を残した勢を実感出来るだろう。)

Thoughts on a Quiet Night Li Bo

Moonlight pours down around my bed,
I wonder whether it could be frost I see upon the ground.
Looking up, I find the bright moon,
Looking down, I think of my distant home.

月光は私の床の回りに注いで輝く ふと見ると地上の霜かと見紛(みまご)う
頭(こうべ)を挙げれば 輝く月を見 頭を垂れて 故郷(ふるさと)恋しく

李白(701-762)。字は太白、蜀に移住したソグド(宰利)人の商人の子として生まれたと謂われる。玄奘三蔵はインド旅行(627-645)の公的報告書「大唐西域記」の中で、先ず胡人の習俗を侮蔑を以て述べ、更に、天山北路のイシク・クル湖(大天池)より西方フェルガーナ(怛悌国)、タシュケント(赭時国)、ブハラ(捕喝国)、シャフリ・サブズ(羯霜那国)等に至るソグド地方を一層著しい偏見を以て記述した。此の大唐西域記の記述は、後世のソグド人の評価に大きな影響を齎した。それから約百年、青年李白は大志を抱いて故郷蜀を離れた。何故彼が故郷を離れたか、何故彼が故郷に帰ることが無かったかは、共に知るすべもない。しかし、玄奘の大唐西域記を読み直すと、改めて彼等ソグド人に対する華人の激しい侮蔑を知って、李白が華人社会で生きることがどれほど困難であったか、そして其のことで如何に彼の自尊心が傷つけられたであろうかと推し量ることが出来よう。誰にでも解る文字を綴り、遂に帰ることの無かった故郷への思慕を詠んだ此の「静夜思」は、読む人に胸の潰れるような彼の悲しみを伝える。

大伴宿彌家持は、藤原氏から一族再興の夢を愚弄され其の一生は喜び少なく無惨なものであった。越中国守として夢を持って赴任(746)しても実状は都を追われたも同然であった。天平勝宝二年(750)三月初め(太陽暦：四月中旬)、春の夜長に眠れぬ儘に「春愁」を詠んでいる。彼は前年妻の坂上大嬢を国府に迎えているのではあるが、藤原氏に事々に疎外される自らの行く末を思っ揺れ動く彼の心の表れであったろう。(万葉集巻19)

春まけて物がなしきにさ夜ふけて羽ぶき鳴く鳴(しぎ)誰(た)が田にか住む(4141)

燕来る時になりぬと雁(かり)がねは本郷(くに)思(しの)ひつつ雲隠(かく)り鳴く(4144)
来燕帰雁の歌は万葉集中この一首だけであると謂う。彼は亦、天平十九年(747)越中赴任の翌年三月、大伴池主への書簡の中で「来燕は泥(ひじ)をふくんで宇(いえ)を賀(ほ)ぎて入り帰鴻は蘆を引きて遠く沖に向かう」と書いており、淵明の発想とほぼ同じで、彼は遣唐使或いは渤海国使の舶来した淵明集などで前述の雑詩十一を読んだのではないか。

大伴氏は我が国古代の最も有力な伴造(とものみやっこ)氏族で、家柄は古いが家格が低い祭祀官の中級官人中臣(藤原)鎌子等の及びもない大氏族であった。中臣(藤原)は蘇我殺害の下働き以後、成上りの身分を自覚すればするほど、彼等の意図に反するもの、更には、競争相手を悉く滅ぼして来た。家格を高く見せる為には、鎌足顕彰の為の捏(でっ)ち上げ『家傳』

を偽作することも辞さなかった⁹⁾。歴史的事実も時代も無視して、高麗の戦略家泉蓋蘇文も新羅の庚淳（正しくは、新羅の名将金庚信）も鎌足の股の下程度の人物で比較にならないと謂う途方もない馬鹿馬鹿しさである。しかし、鎌足の無智に基づく白村江の敗戦に対する最高責任には一切触れていない。是と比べ、武人の氏族は要領が悪かった。家持は延暦四年（785）8月28日、陸奥の任地（多賀城）で68歳で没した。死後、無実の罪で官位等全ての名誉を奪われ、遺骸は掘り出され、子息永主と共に隠岐に遺骨流罪にされた。権謀家で成上りの藤原執念の家格への逆恨みである。以後、大伴氏は越（越前、越中、越後）の国守の座から追われ、再び首長の座に着くことは無かった。

まほろばの大和はとほし雉子のこゑ 春樹 (流され王) ^{10-a)}
 秋風のほかは色なき来迎図 全 (花咲爺) ^{10-b)}

大同元年(806)3月17日桓武天皇崩御の日、家持は平城天皇の勅により本位に復した¹¹⁾。子息永主は何歳になっていたのか。永主の青春はどんな意味を持っていたのであろうか。

墳山（つかやま）の天狼* 父にまぎれなし 春樹 (信長の首) ^{10-c)}

*：天狼はシリウスの漢名、和名は青星。冬の季語で、寒風の中、全天中最も強い青白色の光を放つ。永主は無実の配流地隠岐の冬空に凜然と光る青星を見詰めたであらう。

愚痴の詩（うた）：詠貧士七首其一

此の詩は妻の死後、自らの貧しさと孤独を謡う。此の連詩で古代の清貧の士を讃えているが、自嘲の詩（うた）「詠貧士七首其二」（前篇）と同時に作った愚痴の詩であらう。

詠貧士七首其一 Seven Poems on Noble Scholars in Poverty: No. 1

萬族各有託	All things have a place for rest,
孤雲獨無依	Save for the solitary cloud drifting on high;
曖曖空中滅	When faintly it fades away in midair,
何時見餘暉	Never to retrieve its afterglow again.
朝霞開宿霧	As the mist lifts in the morning glow,
衆鳥相與飛	Flocks of birds take wing together,
遲遲出林翮	But one bird alone is behind the rest in leaving the wood,
未夕復來歸	And in the early evening it returns again.
量力守故轍	Within my limits, I try to keep my own way;
豈不寒與飢	How can I avoid the hunger and cold haunting me.
知音苟不存	As I have no close friends who understand me,
已矣何所悲	Why should I feel sorrow about such a thing.

万物はそれぞれの身を預ける処があるのに 離れ雲のみは寄辺（よるべ）が無い
 ばんやりと霞んで消えては 名残りの輝きを見せる時は来ない

夜来の霧は朝焼けに晴れて	多くの鳥は打ち連れて飛び立つ
その後一羽遅れて飛んで行くけれども*	日暮れの前に亦早々と帰って来る*
力を知って独り自からの道を歩けば	凍(こご)えと飢えとは免れようもない
真の友が居ないならば	やむを得ぬ、いたずらに悲しむまいぞ

*：他の人々と協調できない自らの依怙地な性格を述べ、其の為の没落の覚悟を詠む。妻の死による鬱状態の中で作った自らを励まそうとする孤高自立の詩ではなかったか。

曾祖父、外祖父は武人、高級官僚として輝かしい貴族、名族で、祖父もまた要衝の地武昌の太守を務めた士族の家と云う高い誇りと自尊心を持つ淵明には、少数民族と謂うだけで華人から加えられた屈辱の経験を詩賦には書き残せなかった。自分よりも素養のない人々の加える理屈抜きの民族的侮辱、そして、多くの場合平静さを装って其れに耐えねばならなかった彼の無念さを此の詩篇からも読みとれる。既述の「詠荊軻」¹²⁾、「讀山海經其十(猛志の歌)」²⁾の詩は、屈辱感と無念さをもつて耐えに耐えた憤りを噴出させたものと言えよう。年老いると共に憤りは諦めとなっても、心を打ち明ける友の居ない孤独な彼には、高い誇りゆえに時として鬱積した憤りの噴出は止むを得ないものであったろう。

第三章 死と生との対話(其一)

先輩の誘いを辞退して：和劉柴桑

制作年代は不明である。淵明45-6歳頃の作と推定される。若い頃から死について考え続けて来た淵明に、元柴桑県令の劉程之が送った隱棲を勧誘する詩に答えたものである。

Returning to my Hut in the Early Spring

山澤久見招	Nature has long beckoned me;
胡事乃躊躇	Why should I still linger?
直為親舊故	Only pondering my kith and kin,
未忍言索居	I can not bear to tell them of my seclusion.
良辰入奇懷	One day a strange feeling entered my heart;
挈杖還西廬	So, I returned west with cane in hand to my hut.
荒塗無歸人	Along the way overgrown with weeds,
	I saw no traveler returning home
時時見廢墟	But from time to time many a deserted homestead.
茅茨已就治	It's time to begin repairing my thatched roof,
新疇復應畚	And to burn and plough my fields.

谷風轉淒薄 When the east wind turns somewhat cold,
 春醪解飢劬 A spring brew cures my hunger and toil.
 弱女雖非男* Its mellow taste is like a young girl,
 慰情良勝無 And lessens my lonely feeling like nothing else.

栖栖世中事 This bustling world is uneasy and insecure,
 歲月共相疏 And I've become a stranger through the passing years.
 耕織稱其用 Farming and weaving support my daily life well enough,
 過此奚所須 And I need nothing beyond what I have.
 去去百年外 By and by, after a hundred years have passed,
 身名同翳如 My body and fame will have vanished without any trace.

*：幼女とする説と穏やかな味わいの濁酒とする説とがあり、後者をとった。冬に仕込んだ 春出来のどぶろく（濁酒）は、仕込み中の温度が低い為に熟成が不十分で味が薄い儘になり易い。したがって、飲めば空腹を癒す粥のようなものにもなる。

自然は長い間私を招いているのに どうしてまだ躊躇っているのでしょうか？
 ただ親しい人々の事をつくづくと考えれば 未だに離れて住むとは言い出せなかった
 ある日 不思議な気持ちに襲われ 杖を手に西の庵に帰って来た
 草生（む）した道には家路に急ぐ人の姿は無く あちこちに打ち捨てられた家々があった
 庵の茅葺き屋根の修理を始め 新しく開墾した畑に火入れして耕作を始める時期が来た
 風はまだまだ冷たいが 春の濁酒は飢えと疲れを癒す
 （春出来の）酒は未熟で味が薄いが 味わいは 我が心細さを慰めるに足りる
 世の中はせかせかと慌ただしい 私は移ろう年月と共に世事に疎（うと）くなった
 畑仕事と機（はた）織りで私の日々の暮らしには足り 此れ以上何も求める必要は無い
 百年の生命を過ぎれば 体も名前も跡形なく消え去ってしまうものを

此の詩の終二句で、人は何時か必ず死ぬとの諦観を示している。劉程之は淵明に仏教教団「白蓮社」への入社を誘う詩を送ってきたのであろうか。淵明は農耕の中で生きて行くことを述べ、先輩の劉程之の誘いへ礼を尽くしての断りの返詩を贈ったのであろう。

現代医学はヒューマニズムの名のもとに延命を目標とする余り、延命すべき生命の質への配慮を欠く場合もあろう。癌の終末医療に、患者の望む処と関係なく医師自身の興味等で延命治療が行なわれる場合も少なくない。「死期が確実に迫り、苦痛も激しいのに、家族を外に出してまで行う延命治療が患者にとって幸福な最後といえるのか」と謂う新聞の主張は、此の種の終末医療を批判している（産経、'94-5-16）。「厚生省が先ごろまとめた調査によると、組合健康保険の加入者（高齢者以外）で、入院中死亡の人の医療費は平均二百十五万円。この半数以上はがん…。死亡した月の医療費は、注射料が一日平均二万円。処置料、手術料、投薬料、検査

料を合わせ、積極的治療を示す医療費が全体の七八%を占め..、前回(五年前)と同じ水準で...延命のために大量注射する末期医療の実態はあまり変わっていない...延命治療を拒否して退院を迫られたケースもある..」と。

患者は生死を医師に委ねるべきで治療内容に口を出すな、との傲(おご)りを持つ者もいる。医師志望ではないが高偏差値だからと理系入試に挑戦した者が、得点が一点でも高いことで選考され、医師になっていった場合が少なくない。彼等は何を考えているか判断出来難い者の居る年代であった。少し前には尊敬すべき家庭の出であると直感できる者が多かったが。定年退官を控え、私は今どのような若者を教育して来たのかと考えた。そこで、試験ではなく、何故医師になろうとしたかを書いて貰った。今回も信頼できると感ずる者も少なくはなかった。他方、医師になりたいと考えたことはなかったが、自分は高偏差値だから相応しい待遇を受けるべきと考え、医師になることにした。金を儲ける為に医師になって何処が悪いのか。医師を生命を対象とする職業者などと考える必要は無い。ビジネスの対象が病人であるに過ぎない。衛生学の教授がこのような調査をする資格があるとは思わないが、定年前で出さなければ気の毒だから出すだけだ、等々。どんな家庭の出であろうかと考えさせられた。感想を書き入れて返すか教育資料として保存するか迷ったが、一部を手元に置き其の他は焼却した。当否は別としてそれなりの努力を感じたからである。貴重な資料ではあったが、後で、彼は何で医師になったのか、学生時代どんな考えであったのか等々、単なる興味の対象にされるのは気の毒と考えたのであった。

一点主義選考は受験生にあたかも公平そうなジェスチャーを示す。目先の人気取りのジェスチャーが医師としての資質を選考の対象から外すことになる。文系教養に優れた資質を有する受験生も、彼の入試評価への反映は微弱である。このような文系軽視は、例えば、陶詩の死への拘(こだわ)り・諦観等、心の問題への感性とは無縁の医師の増加をもたらす。日本の医学教育の基本に関わる問題であるが、現行医学教育の中で大学の果たし得る人間的な再教育は既に遅過ぎることに気付かねばならない。根本的には、日本の家庭の躰け・教育の中で培われるべき個人としての精神構造に問題が存するものと言うべきである。医師過剰時代の到来が叫ばれて久しい。しかも、其の日は直ぐ其処に来ている。医療社会外からの医師の再教育の要求は厳しくなっている。しかし、どのような医師が要求されるかを論議している時間はないに等しい。一点主義選考の反省が求められているのではないか。如何であろうか。

人生は幻(まぼろし)に似て：園田の居に歸って、其四

淵明42歳の作。彼は前年(405)11月、彭澤の県令を辞して故郷に帰ってきた。束縛から解放された喜びを「歸去来の辞」に述べ、其の頃「歸園田居五首」を作った。田園生活を楽しんでいると思われたが、早くも本詩の終2句では「人生は幻に似て ついには空無に帰するのだ」と、彼の隠遁生活が生への疑問を其の始まりに置いたのを窺わせる。

歸園田居其四

Back to the Rural Life, No. 4

久去山澤游 After a long absence I wander over the hills and marshes,
 浪莽林野娛 And my pleasure is boundless among the forests and fields.
 試攜子姪輩 Once I walked with my sons and nephews,
 披榛步荒墟 Thrusting aside hazel bushes on our way to a ruined village.
 徘徊丘隴間 Walking past burial mounds on a hill,
 依依昔人居 We found a deserted house.
 井竈有遺處 The crumbled old well and furnace were still there;
 桑竹殘朽株 And the upturned roots of mulberry and bamboo, as well.

借問採薪者 “May I ask you,” I asked the firewood gatherer,
 此人皆焉如 “Where have the old residents of this house gone?”
 薪者向我言 “All of them have gone,” he said to me,
 死沒無復餘 “And they have left without a trace.”
 一世異朝市 For one generation only does the court stay a bustling place;
 此語真不虛 Very impressive is this saying, but true.
 人生似幻化 Human life is like a mirage,
 終當歸空無 It all ends in nothingness.

久し振りに山や沼地を漫(そぞ)ろ歩く 森や野の娛しみは 果てしない
 思い立って子や甥達を引き連れて 草木を押し分け荒れ果てた廢墟にいった
 小高い墓地跡を行きつ戻りつすれば 其処には故人の住居跡も残り
 井戸や竈(かまど)の跡も昔の儘で 桑や竹の朽ち株も其の儘残っていた

「薪拾いの方(かた)よ、お訊ねします」 「此処の人に何が起こり何処に行ったのか」
 薪(たきぎ)拾いは私に言った 「皆死に絶えて一人も居ない」と
 『宮廷も盛り場も一世代三十年で入れ変わる』との諺(ことわざ)は真実で嘘ではない
 人生は幻(まぼろし)に似て 結局は何も彼も虚無に帰える

形影神并序：肉体と影法師と魂との対話

淵明は生と死について長い間思索を重ねてきた。本章の始めて「和劉柴桑」(45-6歳頃の作)について論議したが、其れに関連すると考えられる本詩は49歳の頃の作と謂われる。当時、淵明の住居に程近い廬山東林寺の僧慧遠(えおん)は僧俗の結社白蓮社を作り、評判が高かった。淵明も入るよう誘われたと謂われる。彼の思想に何等かの影響があったものと考えられている(一海知義)⁷⁾。肉体と影法師と魂との対話と謂う詩の形式は前例に乏しく、慧遠の「佛影銘」(412A.D.,淵明48歳)が初めてと謂われる。淵明の三部作の本詩は解釈が難しい。吉川幸次郎教

授は「陶淵明伝」(解説：一海)¹³⁾で現存する淵明の作品の三分の一以上の詩について、其の全訳を分析した。しかし、形影神并序の三部作の詩については問題点を指摘するに留まり、其等の全訳と分析とを全く採録していない。うち二篇については、のちに別に説かれたが、最後の一篇については遂に現われなかったと謂う(一海)¹³⁾。非専門の者には荷が重い。しかし、次篇に英訳を記載することにする。

第四章 差別とは

筆者の一人櫻井は、是迄の小論での用語について何度か、シナ等と差別語を使わない方が良いと助言された。果たしてそうであろうか。差別とは何かについて論議して置くことは必要であるように思われる。本章の論議は総て櫻井の責任でなされる。

元来トルコ系と謂われる古代大秦帝国の情報が同族を通じ西方に伝わり、Sin, chin等の呼称になった。支那とは支那人自身による其等に対する造語の一つである。しかし、遮二無二差別語として非難し続けようとする者は不勉強か、知りつつ何等かの意図を持って非難する者であるように思われる。以前に松田寿夫教授が其の著「東西文化の交流：世界史新書，至文堂，'62」や同じく「アジアの歴史：NHK市民大学叢書21，'71」の中で偏見なくシナ，シナ人と使っていたのを想起し、其等と大唐の僧道宣の「続高僧伝：大正新脩大藏經，再版第50巻，'71」とを栃木県立図書館から借り出し、読み直した。玄奘は、627-645ADのインド旅行の公的報告書「大唐西域記」で、古代印度の世界像を述べ、世界を四天下(佛世界中央の須弥山の四方にある四大洲)に分けた。すなわち、三つの佛世界と南の人間世界に分け、此の人間世界「瞻(せん)部洲(ジャンプ=ディーパ)」を南の象主・西の宝主・北の馬主・東の人主の四区域に分けて説明した。「続高僧伝巻第四，玄奘傳；同上書，pp.446-459」は、「大唐西域記」を要約解説する。

「彼土常伝。瞻部一洲四王所治。東謂脂那。主人王也。西謂波斯。主宝王也。南謂印度。主象王也。北謂獫狁(xianyun)。主馬王也。」と。東の脂那(しな)は暢やかな気候で人が多く人主の国であり、西の波斯(べるしゃ)は海に臨んで財宝が多く宝主の国である。南の印度は暑熱の気候が象の成育に適し象主の国で、北の獫狁(けんいん)は匈奴(モンゴル遊牧民)とも呼ばれ、其の寒勁の気候は馬の成育に適し馬主の国である、と解説している(松田)。優れた人間の世界をシナと呼ぶのは先の小論で論議した中華思想であり、馬主の国の住民はケモノ偏を付けた獫狁、すなわち、獫(口の長い犬)のような人間とケダモノ扱いをしている。(北西地区に住む彼等を北狄(犬)西戎(猿)とも見下す)。道宣は更に「問從何來。答從支那國來欲學瑜伽等論」(何処より来たかと問われ、支那国より来たと答えた)、「有支那僧來此學問」(支那の僧が此処に来て学問した)等、五ヶ処に玄奘の本国を「支那」と明記している。松田教授は、日本人が創作した差別語との非難を承知の上で其の愚かさを無視したのであろう。支那とは日本人の造った侮蔑語だ、支那ソバでなく中華ソバと言うべきだ等と、常軌を逸した自国非難を煽りたて弄臣

の言を繰返す人々は何を意図しているのか？ 陰險な言葉狩りをする集団は何を目的とするのか？ 彼等を注視すべきである。

小論はまた、部落民、穢多と差別されて来た人々に言及したが、是迄も其等は差別語であるから使用しない方が良くと助言の体裁を借りた非難を受けた。私の父は約八十年前無医村に招かれた折、方面委員として人々の相談にのった。部落の氏神白山(比咩)媛神についても調べ、彼等の疎外は不当なものと同信した。父は約六十年前県道改修工事の際に、県道予定地上の部落の氏神社を傍らに移させ、部落中央をぶち抜いて県道を通すのに力を尽くした。恨まれたが、何時か村の祇園社に其処からも氏子総代が出ると言ったそうだ。当時の祇園社神主は数百年間代々社を守って来た旧家で、東京美術学校を出られ、父は親交を結んで居て神に差別はないという話をしたと言う。筆者は数年前定年退官し宇都宮に帰り、60年振りに会った其の町の人から其の小字(こあぎ)の祇園社氏子総代が近年父の話の通りになったのを教えられた。父は口数が少なく、時間があれば医学書を読み、疲れると日本の古典、仏教説話等も読んでいた。筆者は父の影響で中学入学後20銭の岩波文庫の古事記を買って読んだ。二年生の半ばに岩波文庫の日本書紀(上中下)を買ったが難しく、国文学F先生に解説書を借りに行った。古事記で何処が面白かったかと訊かれ八千矛の神が出雲から高志(越)の女王沼河比売(媛)を訪れた求婚の一章と答え、重ねて、其れは現代語に訳すのは憚り多い。さらに、八千矛の神は馬で沼河比売を訪れたように歌うが(其の後、后須勢理毘賣命(きさきのすせりひめのみこと)が嫉妬した時、馬に手を掛け大和に往くぞと焦(じ)らしている)、日本海流を利用した舟行も考えるべきだ等と言って、其の部分で朗読した。先生は「本物だ」と、先ず出雲風土記や山城風土記を、次いで日本書紀(通釋)を貸して呉れた。通釋は歴大で明治時代の解説書であったが挑戦した。実は古代史への興味と謂うものの実際には少年倶楽部やマンガへの興味と同じものであったのだが。日本書紀には其の頃の皇国史観など消し飛んでしまう記述が山とあって、面白かった。父に継体天皇はおかしいと言った時、「南朝の忠臣北畠親房公の神皇正統記なら国粹主義者もお前に文句を言うまい」と言った。F先生からお借りした。親房公もほとほとお困りのようであった。越の国から出自の明らかでないお人が大和に進攻し仁徳王朝の武烈帝を倒して皇統を継承したのではないのでしょうか、天皇になってから大和に入る迄廿年もかかるとはまともではない、と言ったら、先生に「こんな時代に何と言うことを。絶対に誰にも言うな。君は殺されるぞ。どうしてそんなことを考えたのだ」と叱られた。昔、刺青され穢多等と疎外された人々は、元来継体軍団の武器を作った造兵氏族ではなかったか。だから協力した豪族の懐柔の為に分かち与えられ、豪族達は彼等は特別に重要な集団であると、逃亡を予防する為に刺青を際立たせたのだらう、と父との話を告げた。昭和14年であった。

継体天皇の誕生地とされる福井県坂井郡三国町(日本書紀古名:三国坂中井)は絶対に港町でなければならない、と考えていた。三国町には所謂部落は存在しなかったと謂われる。継体軍団が越の国から大和に発進した際、全造兵氏族を引き率れて行ったと考えると、この氏族の

歴史に夢が生じよう。三国海岸の後背地に住居跡・踏躰(たたら)跡等があるのではないかも考えた。大木俊夫教授が印牧邦雄：福井県の歴史(山川出版、'73)の中の記載を教示して呉れた。「..近年、福井県から石川県にわたる加越台地一帯に、製鉄遺跡が散在することが、確認されるようになった」と。更に大木教授は直接印牧教授に筆者の質問を伝えて、同教授より自ら総括として編纂に当たられた『芦原町史』(芦原町教育委員会、'73)第四章「古代の郷土」(重松明久教授執筆)の複写の送付を受けた。「継体勢力は製鉄業を經濟地盤とした豪族であったらしい。新羅系の帰化人で鑄造業者として最も著名な秦氏が、古来坂井郡を中心とする越前一帯に多数分布していた。九頭龍川も、中国の神話伝説の九頭の龍神としての相柳の日本名に違いない..」と。疎外された人々が継体軍団の造兵氏族ではなかったかと謂う昭和14年旧制中学4年生時代の偏見無き推論は、其れなりに的外れではなかった。

白山比咩神社の祭神には異同変遷が多い。本居宣長は「社号(やしろのな)すなわち其神の御名なれば..ただその社号を神の御名としてあらんこそ古への意なるべきを..」(玉勝間 355段)と其の事情を明らかにしている。人々は白山をご神体山と崇め絶対に登らなかったが、人々の固有の信仰を無視して高句麗人僧侶泰澄は、功名を求めて押し登り頂上に高句麗(くくり)媛神を祀った。其れ以来、祭神について混乱が生じた。しかし、白山比咩を祭神とする信仰の本質は変わらなかった。平安貴族は偏見なく白山女神に憧れを持っていたように思われる。「年ふれば越の白山老いにけり多くの冬の雪積りつつ 壬生忠見：拾遺集」、「白山に年ふる雪や積らん夜半に片敷く袂冴ゆなり 前大納言公任：新古今集」等と。父は、「白山比咩神社を氏神として千数百年も崇めてきた集団が部落民として疎外され小集落に閉じ籠もってしまった。しかし、此等の人々の歴史を考えると、白山族とも謂うべき誇りを胸に生きて行けば良いと思うのだが」とも言っていた。

前編「疎外の民」で「台湾で客人(けーらん)族の教授と..」と記載したが、台湾の知人が来日した時に筆者宅を訪ねて呉れた。話の中で、彼は前小論に触れた際、客人は普通語だが客人族は差別語になるから「族」を付けない方が良いと助言して呉れた。

台湾語は、中年の男女、或いは中年の女性同志で静かに話すのを聴いていると、ピンポンの球を交換するような音楽的なリズムを感ずる。若い世代は此のような美しい台湾語を話せないようだ。若い人々は台湾語を軽蔑し殊更に中国語を話しているように感じられる。筆者がかつて台湾大学医学部内科学で百歩蛇毒による実験的腎炎の講義をした時、筆者の50数年前の北京官話はたどたどしく3分の1位しか通じない。学生の顔に軽侮の色を見て、直ぐに在米中の講義でアメリカ訛りのKing's Englishと冷やかされた英語に切り替えた。学生の態度はすぐ変わった。講義の中に台湾語で術語を入れたが、学生は混乱した。教授は学生たちは台湾語の知識を全く持って無いと言った。筆者が台湾語の術語を使うと教授がすかさず中国語に通訳した。以後、筆者の台湾語は混乱し話せなくなってしまった。美しい台湾語にも、侮蔑の語彙の多いことでは世界屈指ではないかと感じていた。喧嘩語の汚いことは台湾人以外の者の理解を超える。

筆者は知らずに非友好的な用語を使用した。客人族から「族」を削除する。何故、筆者が此のような誤解を持ったのか。

客人は自らを正統の漢民族であると主張し、漢人と称している。近年は系図作りが流行し、支那の伝説上の黄帝から始まり、大陸中国における本貫の地名、先祖の氏名、大陸内の移動地と現在に至る氏族の詳細な氏名とから成っていると謂われる。客人はまた、台湾人は総て漢民族であるから総て漢人であると言っていると謂う。こうした言動が客人以外の台湾人の反感を誘発したようだ。

或る由緒有る台湾人の友人は言う。台湾は元來亡命者が高砂族の地に割り込んだ処で、日清戦争後の馬関交渉の際、漢族の李鴻章からあんな瘴癘の地は放棄するから収めて領土とすればよいと見捨てられ、日本が正式に割譲を明記させた経緯の土地である。科挙試験で資格を得た大陸南方の人が清朝の中級官吏になって赴任して来ていたが、薬屋もない台湾で病を得て死んで行った人々を憐れみ、何時かは大陸南方の本貫の地に埋葬してやろうと仮葬して置かせた仁慈を記憶し、今も鹿港の旧清朝官吏の子孫を尊敬している人々も多い。此等の子孫は系図を作って法螺を吹くことも無い、と。

歴史好きの彼はまた言う。日本の歴史では、出自の明らかでない戦国大名達は源平藤橘に由来する名家の子孫と謂う系図を作らせたそうではないか。其れが系図を作る理由である。漢人族と漢族とは違う。氏族の由緒に自信を持つ者は客人族のように箔を付けようとはしない、と。(客人族が差別語であるという語感と言われて見れば解るような気もする。)更に、台湾人とは元來が先住の高砂族と後來の古來シナ人から南蛮(爬虫類・ケグモノ共)と侮蔑されてきた南方人の構成する島民を指す。高砂族とは美しい呼名であるが、戦後大陸から來た政府は、日本人が其のように呼んだからと禁止して、高山族と呼ぶことにした。何と言う侮蔑であろうか。彼等は元來、海岸までの平地に住んでいたのだ。山岳地帯まで追いやられたからと言って、高山族と呼ぶとは後來の割り込んできたものが言うべき呼名ではない、と。そのような差別語を使うから、何時まで経っても本省人と外省人との間に差別的語感を引摺ることになるのだ、とも言う。李登輝總統は、台湾人とはしか言わない、と。私は何時も彼の意見に深い感銘を受ける。

おわりに

旧制の中学や高等女学校で漢文を学び、現在でも陶淵明の詩をさらさらと暗誦する人も少なくない。現在、暗記教育は生徒の能力を引出さないと言う教育学者もいるが、此のような教養は老後の生活を豊かにする。しかし、中国系の人々でも淵明が漢族に属して夷民族と侮蔑されたことを知る人には出会ってない。暗記教育と言えば、最近鴨長明の「方丈記」を軽やかに暗誦するご婦人に会った。学校時代に暗記した由。どんなに其の生活に潤いをもたらしていることかと、印象深く、大きな驚きであった。敗戦後、占領軍内部における中国政府の影響とど

のように関連しているのかは解らないが、日本語読み漢文教育は廃止させられた。日本語の読解力の低下は脳の発達への刺激を弱めるという学説も、あながち荒唐無稽なものとは片付けられない深謀遠慮であったのかと思うのは、考えすぎであろうか。

ところで、この小論は一貫して淵明が溪族に属して夷民族と侮蔑されたと謂う視点に立っている。そして、傲慢さ、思い上り、欺瞞は時を隔てても変わらない人間の特性であり、一たび権力の座について他の人々が弱さを示せば、忽(たちま)ち見下し、差別するのも亦人間の特性であると考えられる。したがって、淵明の詩史から現在の事象を観察し、陶詩を英訳する作業の中で必然的に現代の人間性から陶詩を読んでくる。そして、是迄の解釈とは違った立場を取らねばならなかったことも再三であった。此のことから、東アジアの、また、在米の主として中国系・台湾系の人々の意見に接する機会を見出だした。此の小論でも少しく其等を反映して、読者に不快感を抱かせたかと思うが、淵明の詩史は人間の経験を写して現代の史実に繋がるものと考えている。

文 献

- 1) 李長之著。松枝茂夫・和田武司訳：陶淵明。筑摩書房。1966。
- 2) 櫻井・大木・Kelly：「陶淵明考」(其四)「疎外の民」。東と西：漢詩の英訳(6)。本誌，8，61-91，1994。
- 3) 忍甲一：史実から抹殺された「米兵専用慰安所細見」。正論，8月号，174-189，1993。
- 4) R.B.Finn著。内田健三監訳：マッカーサーと吉田茂。下巻，注釈，p.29(8-5)，同文書院，1993。
- 5) 田原総一郎：自民党の“悪知恵”に脱帽，Voice，11月号，50-51，1994。
- 6) 松枝茂夫・和田武司：陶淵明全集，a)上巻，b)下巻。岩波文庫。1990。
- 7) 一海知義：陶淵明。世界古典文学全集 25，pp.7-206。筑摩書房。1968。
- 8) 櫻井・大木・Alexander：東と西：漢詩の英訳の試み。本誌，3，59-68，1989。
- 9) 村松剛：世界史の中の日本。危機の指導者群像(十)，敗戦の衝撃。正論，8月号，340-351，1993。
- 10) 角川春樹：a)流され王，pp.87-99(白鳥塚)。牧羊社。1983。 b)花咲翁，pp.5-84(阿修羅王)。富士見書房。1989。 c)信長の首，pp.167-174(墳山)。牧羊社。1982。
- 11) 橋本達雄：大伴家持。集英社。1984。
- 12) 櫻井・大木・Kelly：「陶淵明考」(其三)「追想」。東と西：漢詩の英訳(5)。本誌，7，63-92，1993。
- 13) 吉川幸次郎：陶淵明伝。中公文庫。1989。

別 章

漢詩英訳の検討

1:5のような数字は、その順番で節、行を示す。たとえば1:5は、該当の詩の第1節の5行目を表す。

於王撫軍座送客

- 1:4 登高餞將歸 登高は英訳ではリズムの関係で前行で *On the hill (in this frosty season)* と組み込んだ。餞將歸の歸をそのまま訳して *returning (friends)* とすると、戻ってくる友人達の意味になるので *the departing friends* とする。

和郭主簿其二

- 1:4 天高肅景撤 肅景撤を *the quiet, limpid landscape* として、*clear* の代わりに *limpid* を使ったのは、*clear* を反復するのを避けるためだけではなく、*limpid landscape* は Alliteration をなして、口調が良いからである。
- 2:1 芳菊開林耀は、*Fragrant chrysanthemums open and shine brightly in the glade* となるであろうが冗長になるので、*Fragrant chrysanthemums bloom in the glade* でその雰囲気は十分に伝わる。
- 2:2 青松冠巖列 青松は *green pines* あるいは *green pine trees* であるが、詩においては前者の方が簡潔でよい。

和胡西曹示顧賊曹

- 2:3 感物願及時 感物の物は、前行を受けているのであろうが、結局は、訳詩のごとく *Nature* のことである。*nature makes me fear wasting....* は、*Nature moves me to fear (or be afraid of) wasting....* のようにも訳せる。

連雨獨飲

- 1:1 運生會歸盡 *life moves to its inevitable conclusion.* は英語の決まった表現。
- 1:3 世間有松喬 *There is common talk that....* この意味では *talk* は *uncountable* である。
cf. *word*.

歸鳥

- 3:2 馴林徘徊 徘徊は、*linger* を使ったが、この語は *here and there* と共起するが、*back and forth, to and fro* などとは共起しない。
- 3:4 欣及舊棲 舊棲を *their old turf* と訳したが、*turf* は *OED Supplement* によれば、*one's sphere of influence or activity* の意味。

静夜思

- 1:3-4 舉頭望名月 低頭思故郷 余りにも有名な李白の詩の後半であるが、
Raising my head,.... Lowering my head,.... とするか、もう少し簡潔に *Looking up,.... Looking down,....* と訳せる。

平成7年1月9日受理